2022年度 日本工学院専門学校											
A I システム科											
AIプログラミング実習											
対象	1 年次	開講期	後期	区分	必修	種別	実習	時間数	60	単位	2
担当教員	足高 圭介			実務 経験	有	職種	AIエンジニア／専門学校講師				
担当教員紹介											
図書館情報大学大学院情報メディア研究科情報学専攻修士課程修了。大学院ではニューラルネットワークを使ったパターン認識の研究を行う。現在は株式会社リンクス執行役員CTOとして、AI関連の新規事業コンサルティングやベンチャー企業の立ち上げを行い、主にプロダクト開発に携わっている。											
授業概要											
本授業では、AI分野の様々な手法について、教科書で示されたPython言語による実装コードを入力して実行しながら学んでいく。また、機械学習に関わる項目については、「機械学習基礎」の授業で並行して学び、AIによる自動処理の「中身」を理解する。なお、本授業は、1年次前期の「AIプログラミング基礎」「アルゴリズムとデータ構造」の内容を身につけていることが必要不可欠である。											
到達目標											
「機械学習基礎」の授業と合わせて、AI分野の多様な手法を学ぶことにより、「AI」と表現されている製品やサービスがどのような手法によって実現されているかを整理して説明できるようになる。また、AIシステムのアイデアを企画・提案する際に、授業で扱った事例とプログラムを活用して、Python言語によりプロトタイプ制作できることを目指す。											
授業方法											
「AI」という言葉でまとめられている技術には、近年最も注目されているディープラーニングの他にも、これまでのコンピュータサイエンス・ゲーム・ロボット制御の分野で発展してきた数多くの技術やアルゴリズムが含まれている。AIシステムを構築するためには、これらAI分野における様々な手法の特徴や違いを理解して説明でき、取り組む課題に応じて手法を選択したり、組み合わせたりできるスキルが必要である。そこで本授業では、主としてディープラーニングの前段となるAI分野の手法について、その特徴とPython言語による実装方法を学ぶ。											
成績評価方法											
試験・課題 40% 試験と課題を総合的に評価する レポート 20% 授業内容の理解度を確認するために実施する 成果発表 20% 授業時間内に行われる発表方法、内容について評価する (口頭・実技) 平常点 20% 積極的な授業参加度(予習の有無、発言)、授業態度によって評価する											
履修上の注意											
授業中の私語や受講態度などには厳しく対応する。欠席は基本的に認めない。授業に出席するだけでなく、社会人として働くことを前提とした受講マナーで授業に参加することを求める。課題によってはグループでの作業を行うため協調性も評価の対象となりうる。なお、授業時数の4分の3以上出席しない者は定期試験を受験することができない。											
教科書教材											
「PythonによるAIプログラミング入門」(オライリー・ジャパン)、配布資料											
回数	授業計画										
第1回	人工知能の分類について概要を理解し説明できる										
第2回	論理プログラミングを説明しPython言語で実装できる										
第3回	ヒューリスティック探索を説明しPython言語で実装できる										
第4回	遺伝的アルゴリズムを説明しPython言語で実装できる										
第5回	テキストデータの特性を理解し、収集と前処理の基礎を実践できる										

2022年度 日本工学院専門学校	
A I システム科	
AIプログラミング実習	
第6回	自然言語処理の概要を説明し基礎的な処理をPython言語で実装できる
第7回	連続データの特性を理解し、収集と前処理の基礎を实践できる
第8回	連続データの確率的推論について概要を説明し基礎的な処理をPython言語で実装できる
第9回	音声データの特性を理解し、収集と前処理の基礎を实践できる
第10回	音声認識について概要を説明し基礎的な処理をPython言語で実装できる
第11回	画像・動画データデータの特性を理解し、収集と前処理の基礎を实践できる
第12回	物体検出と追跡を理解し説明できる
第13回	科目で学んだAI関連技術を活用したプログラムを企画できる
第14回	科目で学んだAI関連技術を活用したプログラムを制作できる
第15回	自ら制作したプログラムにAI技術をどのように活用しているか発表できる